利根川中流域の石枕

高木博彦

一、はじめに

利根川の下流域、特に香取郡市、印旛郡市を中心に特徴的な分布を見せる古墳時代の遺物がある。石枕である。この地域に分布する個体石枕（注）を特に常総型石枕と呼ぶことが提唱されている。[1]

常総型石枕の分布について白井氏の「常総型石枕[2]（1）」によって作成したのが第一表である。概観すると茨城県南部から千葉県香取郡市、印旛郡市を中心に分布している。香取郡に東接する海匝郡からは全く出土例はないが印旛郡市より西側では我孫子市と柏市からそれぞれ一点ずつ出土している。さらに、千葉県外に踏み出して西にたどると常総型石枕の範疇か否かは別として群馬県、埼玉県にまで及んでおりしかも現在の利根川の流域に沿って分布している。

まず利根川左岸では群馬県邑楽郡大泉町寄木戸古墳、前橋市上細井稲荷山古墳から出土し、反対の右岸では同じく藤岡市に白石稲荷山古墳から石枕が出土している。同市内上大塚と神田からは精緻な立花様の滑石製品が採集され東京国立博物館に収蔵されている。群馬県藤岡市と神流川を挟んで境を接する埼玉県児玉郡児玉町から美里町にかけて分布する生野古墳群からかつて石枕と石製立花と思しき遺物が発見されたことが旧版の埼玉県史に記されている。これらの石枕ないし立花はいずれも既に世に知られているものではあるが利根川中流域の資料という観点から改めて取り上げることとした。

いうまでもなく、千葉県に接している現在の利根川の流路は江戸時代初頭の瀬替え、いわゆる利根川東遷事業の結果であり、古墳時代のことがらに関して利根川の文字を用いるのは適当でないかもしれないが、現在そう呼ばれている水系という意味で使用することをあらかじめ了とされたい。

茨城県	稲敷郡	4
	鹿嶋市	2
	鹿島郡	1
	行方郡	1
	土浦市	1
	東茨城郡	3
	その他	1
小計		13
千葉県	柏市	1
	我孫子市	1
	船橋市	1
	成田市	8
	佐倉市	6
	印西市	3
	印旛郡	1
	佐原市	8
	香取郡	21
	千葉市	3
	八千代市	1
	市原市	3
小計		57
不明		1
合計		71

表1　常総型石枕の郡市別発見数

二、古墳時代の死者の枕

埋葬にともなって枕の意匠が登場するのは古墳時代前期にさかのぼる。遺体を納める石棺の一端に枕形を彫りだしたものが九州地方や四国地方に出現する。香川県や熊本県などに多くみられる枕造附石棺（注）といわれるものである。また石棺材に直接彫刻してはいないが石棺の端部にピッタリと嵌入されている石枕（注）もある。

石製の棺と枕がある以上当然ながら木製の棺と枕も存在する。事実、岡山県権現山五一号墳にみられるように出土例こそ少ないが木製の枕も確認されている。木棺に至っては極めて普遍的な存在で、前期古墳の竪穴式石室のなかの粘土床を伴った長大な木棺から古墳封土中に直接木棺を埋置したいわゆる木棺直葬に至るまで種々のバリエーションがみられる。

棺と枕の組み合わせとしては、（一）石枕造附石棺、（二）石枕嵌入石棺、

（三）個体石枕設置石棺、（四）木枕造附木棺、（五）木枕嵌入木棺、（六）個体木枕設置木棺、（七）木枕嵌入石棺、（八）個体木枕設置石枕、（九）石枕嵌入木棺、（十）個体石枕設置木棺などの組み合わせが理論的には考えられる。

香川県の石船塚古墳や福井県の足羽山石谷古墳などは（一）の典型例であり年代的にも四世紀の半ばまでさかのぼるものである。（二）は熊本県向野田古墳や岡山県天神山古墳などがこの範疇になる。（三）は割竹形や舟形の刳抜式石棺からの出土例はないが組合式石棺の内部に個体石枕が存在する例は京都府法王寺古墳や同じく赤山古墳など幾つかある。千葉県神崎町小松古墳などもこれに当たる。（四）は現段階、管見の限りではその存在を知らないが、割竹型木棺から木製枕が検出された権現堂五一号墳の例は（五）か（六）に属するものであろう。（七）（八）（九）は実際に存在したかはなはだ疑問ではある。小論の中心である常総型石枕のほとんどは（十）の範疇に集約される。

三、群馬県・埼玉県の石枕と石製立花

①　群馬県邑楽郡大泉町　寄木戸古墳

昭和五四年に開催した房総風土記の丘の企画展「日本の石枕」の資料調査の段階で群馬県の石塚久則氏から群馬県太田市にある内田郷土博物館に石枕が所蔵されている事を聞き及び急きょ同博物館に内田太古庵氏を尋ね石枕を実見し確認した。さらに特段のお許しを得て企画展の後半に展示することができた。当該石枕が同郷土博物館から離れて一般に公開されたのはそれが唯一の機会であったと聞いている。

石枕には「群馬県邑楽郡大川村寄木戸出土／内田郷土博物館所蔵／太田市金山町38－18」と記されたラベルが貼付されていた。大川村は昭和三二年に小泉町と合併して現在の大泉町になる。今回改めて内田太古庵氏に出土の経緯などについて照会したところ、昭和九年、前橋一帯で陸軍大演習が行われその一、二年前から寄木戸付近でも大掛かりな土木工事が陸軍によって行われた。その際工事の排土中から発見され、古代遺物の収集で知られていた同博物館に持ち込まれたものであるという。今回、寄木戸地区の現地を尋ね、地元の住人や大泉町教育委員会に照会したがそれ以上の情報は得られなかった。

石枕は、黒色の強い滑石を素材とし、幅二七・二cm、縦二一・八cm、左上に大きな欠損部があり右下にも少しく欠損が見られる。高縁を一重に巡らせ高縁部での高さは七・二cm、高縁は緩やかな傾斜をもって削り出し、その上端面には一五単位半の山形文が線刻され、詳細に観察すると線刻中に赤色顔料の痕跡がある。高縁の外裾には立花孔が現状で一〇か所見られるが、欠損部に立花孔がもう一か所存在したものと見られる。高縁上面に山形文を有する石枕は奈良県天理市渋谷出土と伝えられる関西大学所蔵の石枕が著名であるが管見の範囲では他に例を知らない。

図１　寄木戸古墳出土石枕

千葉県境関宿町から、利根川の川筋をたどると約四五kmと千葉県域にもっとも近接した出土例である。石質、形状とも常総型石枕そのものであり、出土古墳や共伴遺物が全く不明ではあるが常総型石枕としては比較的古いところに位置付けられよう。

②　群馬県前橋市上細井　稲荷山古墳

東京国立博物館図版目録古墳遺物篇（関東Ⅱ）〔以下「東博図録」と表記〕では前橋市上細井町字南新田一一四六－一、明治四五年一二月発見、大正二年六月二四日付けで群馬県から購入となっている。

『古墳発見石製模造器具の研究』[4]によると、「上野国勢多郡南橘村大字上細井字南新田俗称稲荷山。円墳にして埴輪ありしものの如し。頂上より五六尺にして河原石を粘土にて固めたる底面あり。周壁も同様の石を積み重ね高さ一尺二三寸、広さ二尺、長さ六尺の竪穴式石槨を構成し蓋に五枚の板石を用いたりという（地方廳報告）。石製枕及び刀身伴出。大正元年発掘」とある。

出土地は前橋市の郊外、千葉県境関宿町から利根川の川筋をたどると約八五㎞で千葉県からは最も遠隔地である。今回、古墳の現況等について前橋市教育委員会に照会したところ現地には古墳の形跡はなく市史等地元の文献にも触れたものは無いとのことである。

「東博図録」によれば石枕のほかに坩、釧、刀子、籐、筬、梭、機具、盤、などの石製模造品と直刀が出土している。これらは現在東京国立博物館に収蔵されている。

石枕の形態は極めて特徴的で他の石枕とはいささか趣を異にしている。平面形はほぼ方形を呈しU字型の高縁を巡らせ頸部が当る辺は中央部分が幅一五㎝にわたって三㎝弱程度突出している。立花孔はない。「東博図録」によると幅三二・七㎝、縦二八・五㎝、高さ七・二㎝を測る。底面は僅かにふくらみを有し、側面は削った後で磨いており、全体の三分の二に鉄錆が付着している。方形を基本とする石枕は茨城県土浦市吹上古墳例が知られているが吹上古墳のそれが立花孔も有し常総型石枕に含めて考えられているのに対し上細井稲荷山古墳例は立花孔も具備せず常総型石枕との関連は微妙なところがある。

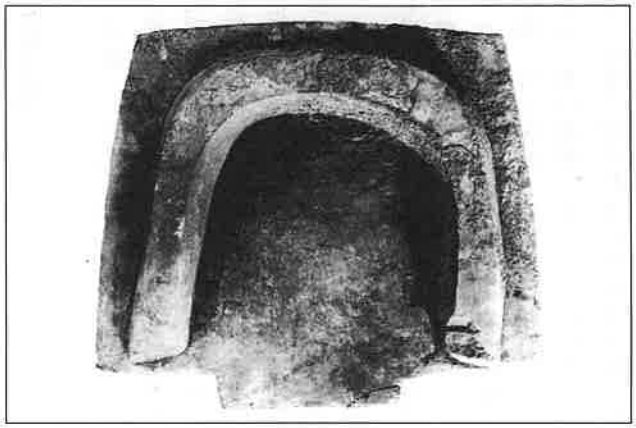

図２　前橋市上細井稲荷山古墳出土石枕

③　群馬県藤岡市白石　　白石稲荷山古墳

利根川に注ぐ鏑川の一支流、鮎川の左岸に位置する前方後円墳である。利根川からは約六㎞ほど離れているがその右岸に位置することになる。千葉県境からは川筋をたどると七〇数㎞の地点である。

昭和八年、帝室博物館の後藤守一らによって発掘調査され、出土した遺物は一括して国立東京博物館に収蔵されている。

「東博図録」では、一四三、藤岡市白石字稲荷原　稲荷山古墳東棺出土品。一四四、藤岡市白石字稲荷原　稲荷山古墳西棺出土品と分けて記載し両者とも、「発見年月日一九三三（昭和八年）一〇月一六日　受理次第、一九三四（昭和九）年七月九日群馬県より購入」としている。

『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告　第三輯　多野郡平井村白石稲荷山古墳』[5]と現在の考古学の知見を加味した『藤岡市史』資料編[6]を参照して概略を紹介しておく。なお、「東博図録」では一四三の石枕は東棺、一四四の石枕は西棺となっているが『白石稲荷山古墳報告書』及び『藤岡市史』では石枕の出自が反対になっているがここでは原報告書に準拠しておく。

主体部は東西二個所から竪穴式の礫槨が検出されている。東槨からは、内行花文鏡一、石枕二、石製箕一、同坩二、同杵一、同案一、同鎌一、同槍一八、同刀子一一四、勾玉一、管玉一一、切子玉二、算盤玉一二五、小玉等が出土している。石枕は二点出土となっているが、その一はU字型の平面形を有し外形に沿って同形の高縁が巡っている。「東博図録」一四四の石枕は、滑石製、幅三五・一㎝、奥行き二六・〇㎝、高さ六・八㎝。立花孔はない。石枕、その二は形状が全くことなり断面は卵形の柱状を呈しむしろ現在の括り枕の形に近い。全長二六・三㎝、幅一五・一㎝、高さ九・二㎝。原報告では出土位置も勘案して足枕の可能性を示唆している。しかし足枕の出土例は管見の範囲では知られておらず枕と異なり埋葬儀礼の中で足枕の必然性に疑問無しとしない。いずれにしても常総型石枕との関連性という点では形状的にも全く顧慮する

図３　藤岡市白石稲荷山古墳東槨出土石枕

必要がない。

西槨からは、変形四獣鏡一、石枕一、石製坩二、同釧一、同杵一、同案一、同下駄一対、同刀子一一三、同剣一七、碧玉製勾玉三、管玉四八、ガラス小玉一〇〇〇余、櫛四、勾玉一一五、臼玉一〇〇余その他が出土している。

「東博図録」一四三の石枕は滑石製、幅三六・八cm、奥行二七・四cm、高七・五cm。平面形は一四四の石枕に比較して幅が大きく奥行がやや短くやや蛤に似た形となっている。底面は浅鉢形を呈し全面にわたって丁寧に磨き、朱の痕跡があるという。立花孔は備えていない。

④ 十二天塚北[6]古墳

白石稲荷山古墳の北に接する方墳、十二天塚北古墳の竪穴式礫槨から、坩形土器を始め紡錘車、管玉、臼玉、勾玉等が出土した。副葬品の構成、主体部の構造等は白石稲荷塚古墳と類似しており、礫槨の遺体頭部と推定される位置に、三〇cm×一二cmの枕状の自然石を石枕のように設置しているのが観察された。定型的な石枕以外にも枕の機能を果たした可能性は否定するものではないが小論は常総型石枕との関わりをテーマとしておりその存在だけを記しておく。

⑤ 伝群馬県藤岡市上大塚

「東博図録」には一三八、伝群馬県藤岡市上大塚出土品として登載され旧地名は、伝旧多野郡美土里町大字上大塚となっている。発見年月日、未詳。受理次第、一九一二年（明治四五）六月二四日亀田一恕より購入となっている。

資料説明には、石製装具一、滑石製。両端折れ。立花か。現存長六cm、他方は、六・七cm。頂部寄りに勾玉四付着。となっている。算盤玉状の装飾に上下を挟まれた軸に勾玉四点を背中合わせに緊縛したデザインである。折損部から上の形状は不明である。

⑥ 群馬県藤岡市神田（じんだ）

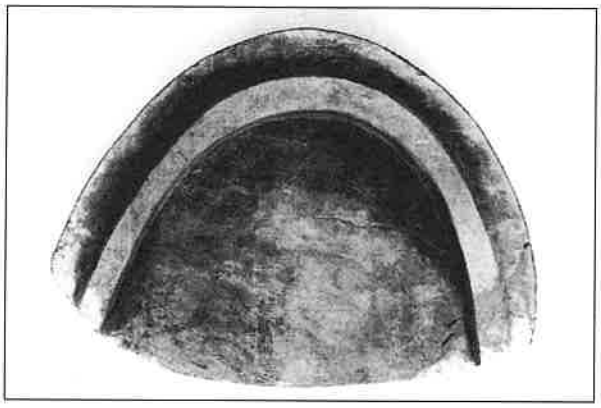

図４　藤岡市白石稲荷山古墳西槨出土石枕

「東博図録」には一五二、群馬県藤岡市神田出土品として登載され、旧地名は、旧多野郡美九里村大字神田となっている。発見年月日、未詳。一九一二年（明治四五）五月六日亀田一恕より購入となっている。

資料説明には、勾玉七、臼玉一括、金環二、石製斧二、石製剣一、飾板一括、垂飾装身具片四、鈴付飾金具一等の遺物とともに石製品残欠一となっている。滑石製。現存長四・八cm。両端折損。調整緻密。立花片か。となっている。全容を想像することは困難があるが、二点のうち一点にはかろうじて算盤玉状の装飾が残存しており上大塚例と同様の形状であったかと推測される。ここにあげた遺物が本当にセットをなすとしたら古墳からの一括遺物と見なすことができるが詳細は不詳とせざるを得ない。

先般、前記上大塚遺跡とともに、地名を頼りに付近を踏査してみたが出土地点は特定できなかった。後日藤岡市教育委員会の文化財担当者に照会した結果も同様で立花状石製品にかかわる情報は「東博図録」以上は現地においても確認できないとのことであった。

上大塚、神田とも新知見は得られなかったが白石稲荷山古墳の数kmの範囲に石枕は不明とはいえ立花の範疇と考えられる石製品が出土しているという事実は看過できないところである。

⑦ 埼玉県児玉郡児玉町　生野山（なまのやま）古墳

昭和二六年に刊行された旧版の埼玉県史第一巻先史原史時[7]代篇の第十章第三節、「児玉郡の古墳地名並びに解説」の項に「町の東方に当る生野山台地の古墳からは石製装飾品のある石枕をはじめ直刀・刀子・女子の埴輪土偶・壺鐙等を出しており」とある。児玉町教育委員会に照会したが、現在この石枕の所在は不明であり、出土した古墳の特定も現段階では困難だという。現存すれば埼玉県下唯一の石枕だけに大変残念なことである。

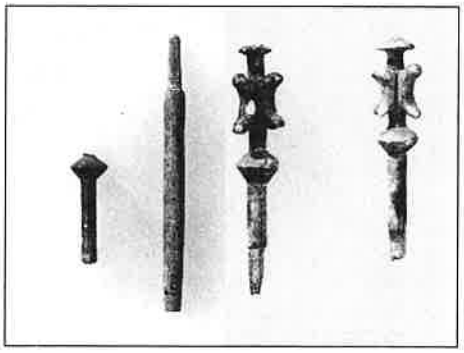

図５　石製立花（左2点神田・右2点上大塚）

四、常総型石枕と利根川中流域の石枕

① 寄木戸古墳出土石枕

群馬県六遺跡九点、埼玉県一件の石枕ないし石製立花について瞥見してきた。まず、大泉町寄木戸古墳出土の石枕は、高縁を有し立花孔を備えるなど常総型石枕の範疇にあることは衆目の一致するところである。常総型石枕の白井編年[8]によると、千葉市上赤塚一号墳、下総町猫作栗山一六号墳北施設など線刻による装飾を有する石枕の多くがⅢ段階（五世紀初頭）に位置付けられ、寄木戸古墳出土の石枕もこの段階と私考される。また白井は、「この段階は上総・養老川南岸の姉ヶ崎に二例の出土があり常総型石枕が南下した時期でもある」としており、香取地域から南方だけでなく西方も含めて一気に分布がひろがる現象の一環としてこの石枕がこの地点に存在する背景を理解しておきたい。

② 上細井稲荷山古墳出土石枕

明治年間の発見であり出土状況も不明な点が多いが、白石稲荷山古墳と同様の礫槨を主体部とする埴輪を有する円墳から出土している[4]。「東博図録」に、五　前橋市上細井町字南新田出土品として石枕と多様な石製模造品が登載されている。これらの石製模造品は、種類や形状など白井石稲荷山古墳と似ており、特に石製坩や石製案などは同一古墳の出土品と錯誤するほど酷似している。

石枕の平面形こそ異なるものの比較的薄い底部に幅広くかつ直角にそばだつ高縁を巡らすなど石枕においても白石稲荷山古墳のそれと近似したものがあり、次項において併せて検討する。

③ 白石稲荷山古墳出土石枕

白石稲荷山古墳から出土した三点の石枕のうち、足枕かともされる一点を除いた二点の石枕について常総型石枕との関わりを考えてみたい。

従来この二点の石枕は常総型石枕の範疇にはないとされてきた。立花も立花孔もなく、箕形とも蛤形とも見える平面形は典型的な常総型石枕とは言えないが、一方で強烈なまでの印象を与える高縁をみると他地域の個体石枕に比較してはるかに常総型石枕に親縁性を求めたくなるのである。

従来、五世紀中葉とされてきた年代観も最近はその前半にまでさかのぼるようであり常総地域の何処かで誕生した常総型石枕の影響下に、前項の上細井稲荷山古墳の石枕も含めてこの上野地域でも石枕が受け入れられたものと考えらる。

④ 常総型石枕のプロトタイプ

沼澤は、上細井稲荷山古墳と白石稲荷山古墳が石枕を受容したのは石神二号墳とほぼ同じ頃、五世紀中葉としたうえで、この石枕のように完成した形で伝播したとは考えがたいとして関東地方へ石枕使用の風習が初めて伝わったのは5世紀前半と推測している。五世紀前半の段階で上野、常陸、下総いずれであったかはともかくとして石神二号墳、白石稲荷山古墳等に先行する常総型石枕のプロトタイプの個体石枕の存在を予見し[9]ていた。

その後に出土した、佐原市山辺手ひろがり古墳から出土した写実的な古相の四個単位の勾玉をデザインした立花は常陸鏡塚との対比から四世紀後半から末という想定がなされている。これに伴う石枕は滑石を用いて製作されており、高縁や立花孔は備えていないが常総型石枕のプロトタイプと位置付けられるだろう。

⑤ 常総型石枕のプレタイプ

さらにさかのぼってプレタイプはいかなる枕が想定されるであろうか。白井は石枕造り付け石棺の存在しない常総地域における個体石枕の出現について、「石枕だけが唐突に遊離して出現したのではなく、その前提には木棺に伴う木製の枕が存在したことは想像に難くない」として常陸鏡塚古墳の例から木枕造附木棺の存在を想定し[8]ている。木製品が土中にあって原形を保ちがたいとはいえいささかの徴証があればともかく現時点でそこまで想定することはいかがであろう。木枕造附木棺が石製のそれのコピーとして十分機能していたとすればその一部分の枕部だけを石に変えていく必然性がどれだけあるのだろうか。

杉山は「石枕もまた模造品として製作されたと考えてよいことになる」とし「石枕は石でない材質でもって作られた枕の形状を模した可能性」に言及し[10]「木棺内に納めることのできる可動の枕であれば（石製でも木製でも…筆者注）問題がない」とし、沼澤は「移入されたとみられる石枕が検出されていないので今のところ明らかではない」としている。

現段階で筆者はプレタイプについての定見を有してはいないが観念的ながら、個体石枕はやはり完結した製品としてその発生から終焉までを捉えるべきであ

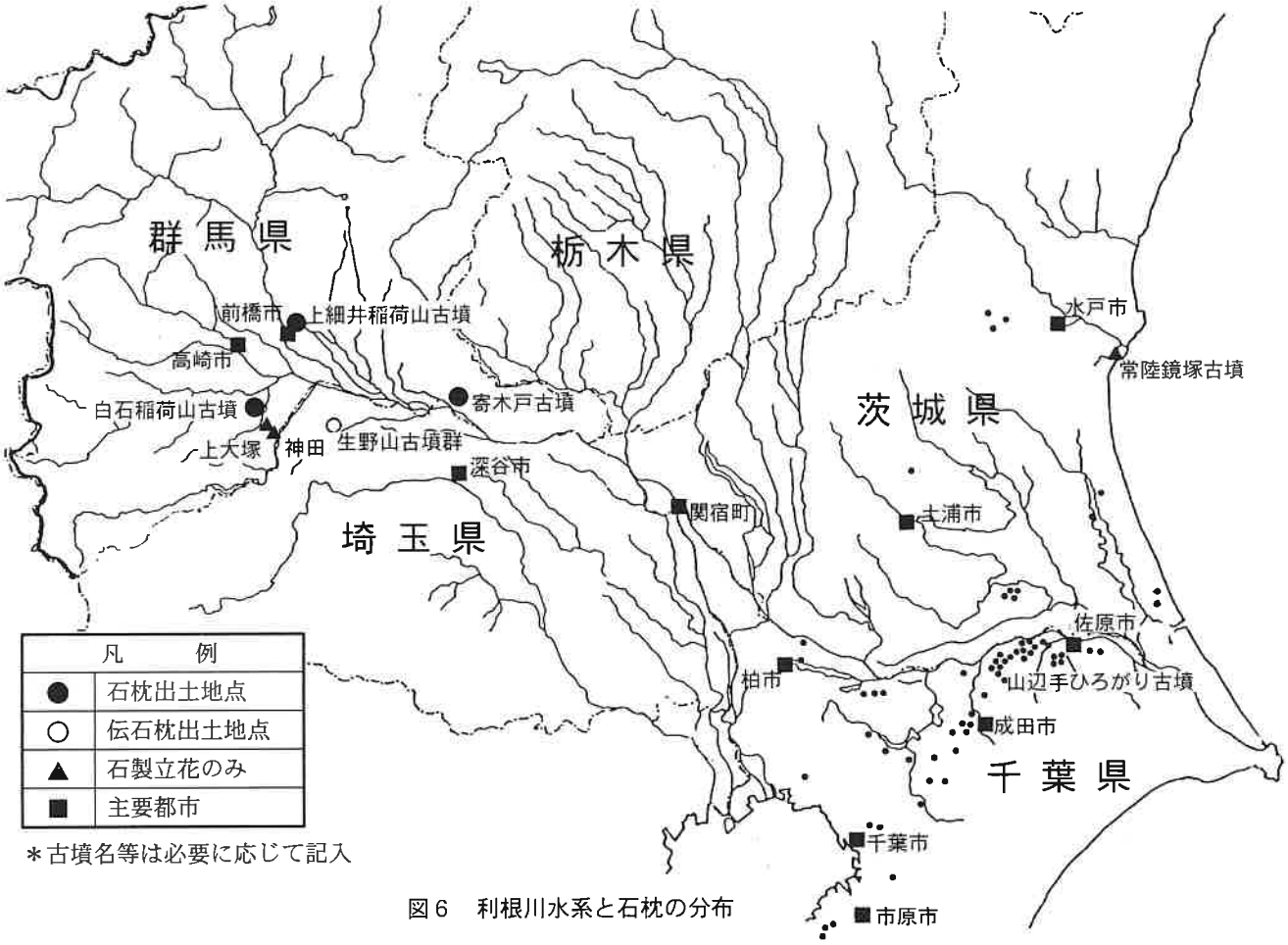

図６　利根川水系と石枕の分布

ろうと考えている。と同時に先学がいずれかの先進地域からの導入を前提としていることに必ずしも同意できないところがある。

手ひろがり古墳出土石枕をみると常総型石枕のオリジンに限りなく近い感じがする。さらに石枕が検出されなかった常陸鏡塚古墳の位置、材料となった滑石の供給地などを考えると常総型石枕の発祥はこの三者を結ぶ理念的三角形の中かその至近に求められるのではなかろうかと想定している。遺体の扱いの中で頭部に特別の配慮をみせることは必ずしも一元的な習俗と限定されるものではなく、各地域における個別発生的な側面も首肯されるのではないか。ただ石製立花、なかんずくそこにデザインされている勾玉は古墳時代を通じて広く各地で祭祀に用いられており石製立花まで関東ローカルと考える必要はない。

⑥　枕と棺の役割

沼澤の石枕論[1]の真骨頂は、その主要な役割を狭義の埋葬儀礼から分離してその前段階に想定されるモガリの場に求めたことである。その論拠として沼澤は立花や石製模造品に残された鼠の齧痕や、立花がことごとく石枕から脱却して一部は石枕の直下から出土していることなどを指摘している。常総型石枕の発生に関連して改めてこの事が問題になってくる。

白井の言うように木製枕造付木棺が単に石枕造附石棺を木製品化したものだとするならそれは当然埋葬の用に供するものであり棺の範疇ということになる。石棺や木棺の内部に枕を表現した彫刻があるとしても、それはあくまでも棺の一形態と解すべきである。石製であれ木製であれ棺と枕は基本的に一線を引いて考えたい。

木製枕造付木棺がモガリの場にしつらえられ、後に古墳中に木棺ごと埋葬されたとは考えにくい。まして木製枕造付木棺が石枕造附石棺をモデルにしたという前提に立つとすれば石枕造附石棺がそのような用いられかたをしたことは古墳築成のプロセスからも考えられない。

沼澤が石神二号墳で提起した石枕、石製立花、石製模造品などの詳細な観察や位置論に基づくモガリ論には可動の石枕が前提であってそのプレタイプに木製枕造付木棺を想定することは考えられないのである。

五、まとめ

いわゆる常総型石枕が現在利根川と呼称されている水系に密接に関わっていることは分布図を見れば一目瞭然である。このことを発祥地点からの移動・伝播という関係、言い換えれば石枕自体ないしその石材が利根川水系の水運によって移動したと解すべきか、はたまたこの水系を基盤として形成される一つの文化圏の中の散発的な一事象にすぎないのか判別することは困難である。

少しく年代は下がるが六世紀の後半この地域から現東京湾沿岸にかけて埴輪や古墳の石材の搬出入が見られることが近時指摘されている。埼玉県鴻巣市の生出塚遺跡で製作された埴輪が遠く市原市の山倉一号墳や市川市法皇塚古墳その他から出土する一方、富津市の海岸に産するいわゆる房州石が埼玉県行田市将軍塚古墳の主体部に用いられていることなどが確認されている。これらの事実は、水系をたどって船ないし筏などの手段で運搬されたと解釈するのが最も常識的であり、基本的には水系が接続していて通船が可能であったことを暗示するものであろう。

石材や大量の埴輪などと異なり、石枕に関しては人間が携行することも十分可能であり必ずしも通船の可否には直結してこないが、利根川水域を紐帯とする政治圏、経済圏、文化圏のひろがりと軌を一にする現象でありその終焉もまたこれらの瓦解を意味するものであろう。少なくとも香取・印旛地域から順を追って利根川をさかのぼって相馬・葛飾をへて群馬県へというように段階的に順次に伝播したのではなく中心地からストレートにもたらされたものと考えたい。この現象はあるいは石神二号墳の現象にも通底するのかもしれない。

本小論に掲載した寄木戸古墳出土石枕の写真は内田太古庵氏の了解のもと筆者の手持ちのものを使用した。それ以外はすべて独立行政法人東京国立博物館から提供されたものである。また、今回現地踏査等においては、大泉町、藤岡市、前橋市、児玉町各教育委員会、内田郷土博物館内田太古庵様、及び藤岡市郷土資料館の外山和夫様に種々お世話いただいた。文末ながら明記して謝意を表するものである。

【引用文献】

(1)沼澤豊「千葉県の石枕」『房総風土記の丘年報三』一九八〇
(2)白井久美子「常総型石枕（1）」『千葉県史研究九』二〇〇一
(3)『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅱ）』東京国立博物館、一九八三
(4)高橋健自「古墳発見石製模造器具の研究」『帝室博物館学報第一冊』一九二七
(5)後藤守一他『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告　第三輯　多野郡平井村白石稲荷山古墳』群馬県、一九三六
(6)『岡市史　資料編　～原始・古代・中世～』一九九三
(7)稲村担元『埼玉県史』一九五一
(8)白井久美子「石製立花と石枕の出現」滝口宏編『古代探求Ⅲ』一九九一
(9)沼澤豊『東国の石枕』古代探叢、一九八〇
(10)杉山晋作「石枕・立花と死者の送り」滝口宏編『古代探求Ⅲ』一九九一
(11)沼澤豊『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター　一九七七

（注）石棺に彫刻された枕形とは別に単独で製作された石枕の総称について本小稿では個体石枕の文字を用いることとする。また、熊本県向野田古墳等の石枕は嵌入石枕と表記し、いわゆる枕造附石棺についても『讃岐高松石清尾山石塚の研究』にしたがった。

（当　館　館　長）